どくとるマンボウ

青春記

北 杜夫

中央公論社

松高のファイア・ストーム

文学方面

有关青春记忆的散文集

どくとるマンボウ青春記　　© 1968 検印廃止　定価 360 円
昭和43年3月1日　初版印刷　　昭和43年3月10日　初版発行
著者　北　杜夫　発行者　山越　豊　印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社　　東京都中央区京橋2丁目1番地　振替東京34番

どくとるマンボウ青春記　目次

珍しく沈んだ書きだし　2
初めに空腹ありき　19
教師からして変である　38
小さき疾風怒濤（シュトゥルム・ウント・ドランク）　57
瘋癲寮の終末　74
役立たずの日記のこと　93

銅の時代 115
医学部というところ 136
もの書きを志す 157
いよいよものを書きだす 185
遊びと死について 203
酒と試験について 223
学問と愛について 236

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どくとるマンボウ青春記

珍しく沈んだ書きだし

青春とは、明るい、華やかな、生気に満ちたものであろうか。それとも、もっとうらぶれて、陰鬱な、抑圧されたものであろうか。

むろん、さまざまな青春があろう、人それぞれ、時代に応じ、いろんな環境によって。

ともあれ、いまこうして机に向っている私は、もうじき四十歳になる。四十歳、かつてその響きをいかほど軽蔑したことであろう。四十歳、そんなものは大半は腹のでっぱった動脈硬化症で、この世にとって無益な邪魔物で、よく臆面もなく生きていやがるな、と思ったものである。まさか、自分がそんな年齢になるとは考えてもみなかった。

しかし、カレンダーと戸籍係によって、人はいやでもいつかは四十になる。あなたが二十七歳であれ、十五歳であれ、あるいは母の胎内にようやく宿ったばかりにしろ、いつかはそうなる。従って、四十歳をあまりこきおろさないがいい。そうでないと、いつか後悔する。

人間というものはとかく身勝手なもので、私は五十歳になれば五十を弁護し、六十になれば六十を

讃美するであろう。

そして、今はもはや若からぬ私が、「青春記」なる題を記して、すぐさま連想したのは、草の芽もふかぬ寒々とした河原の光景である。土手は枯れ伏した草と霜柱におおわれ、眼下には見るからに冷やかな川が流れている。

その多摩川の土手を、黒いマントをはおり朴歯(ほおば)をはいた痩せ細った一人の高校生が歩いてゆく。貧乏神にもう一人貧乏神がとっついて、乾からびて、骨ばって、何日ものを食べておらず、栄養不良と厭世病と肺病にとっつかれているような風貌である。それこそ「カントよりも哲学的な」と芥川竜之介が言った旧制高校生の姿であった。

その浮世離れした姿と前後して、中学三年生くらいの少年が歩いてゆく。彼は冬の河原に越冬している昆虫を採集にきたので、ときどき石をどけたり、土手を掘ったりして時間をつぶす。そのため貧乏神の高校生は瞑想にふけるようにゆるゆると歩いているのだが、ずっと先へ行ってしまう。

しかし、中学生はやがてふたたび彼の姿を見出す。高校生は一本の樹木の根元に腰を下ろして、今から思えばレクラム文庫らしい本を開いているのだ。中学生はそれを横目で見て、かたわらを過ぎてゆく。

そして中学生がまた昆虫採集で時間をつぶしていると、高校生がのろりぶらりと追い越してゆき、ついでまたその読書している姿を土手に見出すという状態が、何回も繰返された。その中学生というのはこの私である。

昆虫好きで自然科学の本はいくらかは読んでいるほか、まったく子供で無知な私の目に、その高校生は一種次元の高き存在として映った。おそらく彼は哲学なんていうものを読み、「治安の夢にふけ

りたる　栄華の巷低く見て」深遠な瞑想にふけり、幽鬼のごとく冬の野をさ迷っているのにちがいない。

そのとき私の心には、まったく未知のものに対する混乱と不可解と、そして漠とした畏れとかすかな憧憬の念とが浮んだ。

漠とした憧憬。これこそ物事の始まりではなかろうか。子供から青春期へ移ろうとする目に見えぬ胎動ではなかろうか。

Nur wer die Sehnsucht kennt,　　憧れを知るもののみ、
Weiß was ich leide.　　わが悩みを知らめ。

私はわざと、かつての旧制高校生がやたらと好んだこの語句を、独逸国の文字にて書き記す。そうしたほうが、あの黴臭くうす汚れた時代が髣髴としてくるからだ。

憧れにも各種ある。ほそい少女のうなじに対する憧れ、轟音を発するスポーツカーに対する憧れ、いずれは甘い子供の時代を離れてなにか難しそうな世界へはいっていこうとする怖れに似た憧れなど。

しかし、私の憧れの芽生えは、もっと巨大な刺激、末期を迎えた戦争のためにおしつぶされた。

レイモン・ラディゲが『肉体の悪魔』の冒頭でなんと書いているか。

「戦争が多くの少年にいかに影響を及ぼしたか、……つまりそれは、四年間の長い休暇であったのだ」

学徒動員で行っていた工場生活、それは決して遊びではなかった。太い鉄材を運ぶには肩の皮膚をすりむいたし、旋盤にむかって油まみれになっているさまは、平和な時代の学生がボーリングに興じ

ているのとはおのずから異なるものがあった。

しかし、そこには英語や数学や物理の授業や試験はなかった。なんの自覚もない中学生にとって、一体どちらが好ましいと思われるか。それに、旋盤という機械にしろ、これは受験のために英単語を覚えるより遙かにおもしろいものである。たとえば「突っきり」といって、ほそいバイトで鉄棒をちょんぎるには、かような文章を書く以上の技術が要る。

私たちは米英撃滅の念に燃えた小さな産業戦士のはずだったが、反面、戦争の与えた自堕落な休暇を愉しんだことも争えない。いずれ、玉砕するために少しも生命を惜しまぬことと、いまこの瞬間にできるだけ怠けようとする魂胆とは、ちっとも矛盾しないのである。

見廻りの教師がくると、私たちは切削油の弁を全開にした。するとおびただしい油の飛沫が四方八方にとびちり、私たちの姿を油だらけにしたが、教師はこわごわ遠くからそのさまを眺め、胸が一杯になって、すぐさまどこかへ行ってしまうのだった。

もっとも失敗したこともある。あるとき私は足に怪我をした。たかの知れた怪我だったが、ポケモン（ポケット・モンキーの略）と呼ばれる背の低い友人が言った。

「これは重傷だ。すぐ医務室へ行かないと生命にかかわる」

それから、こうつけ加えた。

「おれもここが膿んで重傷だ。一緒に医務室へ行こう」

医務室はがら空きで、看護婦が一人だけいた。私は手当てを受け、少しベッドで寝てゆけと言われた。ポケモンも手当てを受け、巧言を弄してこれまた隣のベッドに寝てしまった。

と、青天の霹靂（へきれき）、だしぬけに教師が現われたのである。奇妙な、どこの方言かわからぬ言葉をしゃ

べるその老教師は、本当に心配して駈けつけた模様であった。
「おめえ、大丈夫け。痛むのけ？」
「少し痛いです」
と、私は答えた。
次に老教師は、いくらか疑わしそうにポケモンに向って尋ねた。
「おめえも痛むのけ？」
ポケモンはとっさの間に、私と同じ返事をするのもバツがわるいと考えたのだろう、こう答えた。
「少し痒いです」
「なに、かゆい？　それは癒りかけの証拠じゃ。おめえ、ごろごろ寝て怠けるのでねえ！」
重症のはずのポケモンはとびあがって、たちまち私たちの視野から消え失せた。
――一度、何人かの仲間だけが、小さな分工場に派遣されたことがある。それは本当は時計屋で、しかしその親父は裏に小さな工場を作り、軍需工場の下請けをやっているのであった。そしてそういう小工場にいると、私たちはそれまで考えもしなかった戦争の裏の世界を知った。親父はごっそり儲けているようであった。工員が千円以上の給料をとっていた。私たち学徒の報奨金は月二十五円なのである。しかも、そのあおることあおること（やたらと働かされること）、私たちは真実、生命の危険を感じた。
空襲警報のときだけが、私たちの息抜きであった。防空壕が手狭なため、学徒だけは近くの愛宕山に待避してよいことになっていた。その場所で私は、のちのちまで忘れることのできない、滑稽で同時に怖ろしい体験をした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるとき、警戒警報の発令でさっそく愛宕山へ逃げてゆき、空襲警報のサイレンが鳴ったあとも、空はのほほんと平穏なので、私たちはそこらで勝手に遊んでいた。早春で、もう蟻が地上を動いていた。私はその蟻の列に小さな石を投下して遊んでいた。

彼方の空に、高射砲の弾幕がはられだした。いよいよ敵のB29の編隊はやってきたようだ。私は近くの防空壕の一つへ向おうとして、ひょいと次のような光景を見た。

そこに、一人の友人と小男がむきあって、なにか棒を押しあっている。小男は鉄兜の上に防空頭巾をかぶり、その他の身支度も万全を極め、その棒は火叩きか掛矢らしく、なんとなく七ツ道具を背おった弁慶のようにも見える。もっとも大げさな身なりをはぎとれば貧弱な小男にちがいなかったが。

友人は逃げた。小弁慶は追いすがり、凄まじい恰好で棒をふるってこれを打ちのめそうとした。まさしく活動大写真大活劇の場面である。私は走り寄って、これを引きわけようとした。すると、相手は私にもむしゃぶりついてきた。とどのつまり、私たち二人は防空壕の中へ引きこまれたが、そこには何人かの警防団員がいた。

血相を変えた男が叫ぶのは、おそろしく常軌を外れた言葉であった。この学生どもは、空襲警報が鳴ったのに外で遊んでいる、なんたる非国民、敵機がきて慌てて防空壕にはいろうとするのはなんたる非国民、即刻憲兵隊に引渡せ、というのである。

私はこの男は狂人だと思った。ところが、警防団員たちはいずれも彼にヘイコラし、私たちを本当に憲兵隊に引渡しかねない言動をとった。この男は愛宕山の神官だったのである。

私はもう一つ、似たような経験をしている。自分の家が空襲で焼けたあと、しばらくまだ田舎のおもかげのあった小金井の親類の家に厄介になった。そこから調布の駅へ行こうと思い、不案内な道を

歩いてゆくと、いつの間にか、鉄条網で囲まれた地帯の中にはいりこんでいた。詰所があったので、道を訊こうとすると、いきなりバラバラととびだしてきた男たちによって逮捕されてしまった。その民間人である彼らは、ここは軍の秘密基地だと言い、おまえはスパイに違いない、憲兵隊に引渡すと怒鳴った。それが冗談や閑つぶしではなく、私ははっきりと彼らの一人の目に狂気のいろを見てとった。

私にわかることは、その男にしてもふだんは、まともな、健全な、むしろ善良な一般市民だということである。本物の狂人には彼らのルールがあり、精神病者と身近に暮してみれば、彼らの大部分が、世間一般の人から怖れられるような存在でないことがわかるだろう。しかし、本来は正気の人間が狂うのは始末に困る。そうして、戦争中こうした例がそこらじゅうに転がっていたのである。

これらの事件から、私はのっぴきならぬ教訓を学んだ。一つは、賢からぬ人間が権力らしいものを握ると実に怖ろしいこと、もう一つは、喜劇と悲劇、滑稽と悲惨が極めて接近しているか、或いは表裏だということである。あの神官の、大仰な、とてつもない、棒をふりまわす身ぶりは、このうえなく滑稽なものではなかったか。同時に、その光景を思いだすとなにかしら背筋がゾッとする。

チャップリンは少年時代、屠所に引かれる羊の群から、一頭が逃げだすのを見た。みんながそれを追いまわし、ぶつかったり転んだりした。それは正真正銘の喜劇であった。しかし羊の身にとっては、のっぴきならぬ悲劇である。チャップリンの多くの作品のおかしさ、もの悲しさはこうして生れる。

話がとんだが、私たちはその分工場をうまうまと脱出し、元の本工場へ戻ることに成功した。昼休み、工員が女工員と戯れているさまを私たちは見た。そこで、さようなみだらな環境は、純真な学徒にとってとても堪えられぬ、と教師並びに工場当局に訴え出たのである。本当は、さような環境を大

喜びする年齢であったはずなのに、私たちはせい一杯の悪智慧をふるったのだ。
報告と調査の集会が、本工場の一室で行なわれた。そこで私は、後年のホラ吹きぶりを早くも思わせるテクニックを使用した。
「……とても口にするのもはばかられるような……ええ、ぼくにはとても言えません」
怠けることは怠けたが、私たちはなんのためらいもなく「葬れ米鬼」「一億玉砕」の念に捉われていた。そういう私たちが廻し読みをした本に『昭和風雲録』がある。ここでは単にその序の一節を抜き書きするにとどめよう。
「世上に如何に浮薄なる饒舌が充ちてゐるとも、静夜露の降る時、瞑して耳を澄ませば、心あるものには、一筋に向ふ滔々たる歴史の流れを自ら聞きとることが出来るであらう。それはまた過去幾千年、われわれの祖先が身を以て拓いて来た大道である」
私たちは、小さな子供で何もわからなかった五・一五事件を、二・二六事件を、昭和維新の観念を、この本で読んだ。そして、この廻し読みされてボロボロになった本には、なにか不思議な運命の手が加わっているようであった。
壮士ぶって詩吟を吟じていた気持のよい一友人が、三月十日の夜間大空襲で死んだ。彼と共にあったこの本は当然焼けたと思われた。すると、その前日に別の少年が彼からその本を借り、まだ現存していることがわかった。そういうことが実に三、四回繰返された。ちょうど本を持っているはずの誰かの家が罹災しても、その本はふしぎに他の者の手に移っていた。
『昭和風雲録』の意味はどうあれ、とにかくそこには私に未知だったことが書かれていた。それが私

に、もっとほかの本をも読んでみたらと、誘いかけた。
幸い、一月に繰上げの上級学校の試験があり、私は旧制松本高等学校に合格していた。おし迫った戦局から、そのまま中学の動員先で働いているものの、考えてみれば、私はかつて多摩川の土手で見た貧乏神のごとき高校生と同じ身分になっているのであった。
父は疎開し、兄は兵隊に行っていた。奉公人もいなくなっていた。がらんとした家の中に、母と私と妹だけが暮していた。
唐突の衝動によって、私は父の書斎から、自分に読めそうな本を捜し、今は自分が起居している兄の部屋に運んだ。それまであまりにも大量にあるため、かえって疎遠で近づきがたかった書物を。その中にはレマルクの『西部戦線異状なし』なども含まれていた。結局その当時、私はレマルクまで読み進めなかった。もし読んでいたらどのような感想を抱いたか、いま考えてみてちょっと興味がある。
とにかく、その日本が負けかかっていた春、私はだしぬけのエネルギーを発揮し、朝早く起き、蓄音機にカッコー・ワルツをかけ、そのリズムに合せて廊下の雨戸を開けた。
先に述べた二十五円の報奨金にしろ、私たちには多すぎた。なにより買うものがない時代だったからである。空爆が激しくなる前、友人の少ししゃれた連中は、それでベートーヴェンなどのレコードを買っていた。私はといえば、広沢虎造の浪曲のレコードを買った。カッコー・ワルツにしろ、私にしてみればせい一杯芸術的なのであった。
私はその春を期して、ナニワ節よりは芸術的であるカッコー・ワルツを聞き、工場から戻ったなら今まで縁遠かった書物を読み、旋盤の技術しか知らぬ身から、憧れていた高校生に変身しようと思った。

ところが私は、読書するよりも、もっとくだらぬ外形にまず時間を割いてしまった。帽子に、夢にまで見た白線（旧制高校生は白線帽が特徴であった）を巻き、それに醤油と油をつけて古めかしく見せようと努力した。次に、一人の友人から当時には貴重なものであった地下足袋とひき換えに、でっかい朴歯の下駄を獲得した。それには普通の鼻緒がついていたが、私はどえらい苦心ののち、直径四センチもある鼻緒を自ら作りだし、これを朴歯にとっつけた。旧制高校生の敝衣破帽というのはむろん彼らなりの裏返されたおしゃれで、いつの世にもわざと異様な恰好をし、一般の世人とは区別されたがる人種がいるのと同様である。

私はそのとてつもない太い鼻緒に、更に墨くろぐろと、「憂行」と大書した。憂行（ゆうこう）とは、おそらく『昭和風雲録』辺りから由来した、右翼的で感傷的な、つまり「混濁の世を憂い行く」という意味くらいの雅号のつもりであった。ちなみに、憂行生なら号になるが、憂行では意味をなさない。しかし私は、素晴しい雅号をつけたつもりで内心大得意で、ゴム版を彫って憂行の印を作り、これを自分の持物、友人に出す手紙などに、片端からベタベタと押しつけた。

そんなくだらぬことに時間をかけているうち、戦局のほうは遠慮会釈もなく切迫していた。まず動員先の工場が焼けた。そして私は、平生なら滅多に見ることのない焼死体をこの目で見た。それはほとんど真黒に炭化しているように見え、一部がぱっくりと口を開いて、そこからなまなましい肉の色が覗いていた。そういう死体が、その辺りに三つあった。

しかし、すでに大きな麻痺が私たちを包んでおり、その瞬間は格別の心の動揺とてなかった。仲間の一人が言った。

「ちぇっ、飯が食えねえや」

そして、いくらか離れた箇所へ行って、弁当を開いた。

次には、五月二十五日の夜間空襲で私の家が焼けた。いま思い返せば地獄の体験であったが、そのときは日常茶飯事に自分が遭遇したくらいにしか考えなかった。といって、私は火の粉が目に入り、翌朝まで半分盲となった。

猛火が迫ってきて、いよいよ逃げようとしたとき、私は停電でまっ暗な家の中から、数冊の昆虫の図鑑類と以前に買いだめておいた虫ピンのはいった小箱を運びだし、庭に積んであった砂利の山の下に埋めた。それらは焼け残ったが、平和な時代になって私は何百回となく愚痴をこぼした。それまで私の蒐めた昆虫標本は百箱に達していたし、その中には一生採集をつづけても手に入りにくい珍種もかなりあった。それらの珍種だけでも小さな箱に入れておいてなぜ持ちださなかったのか、と。だが、その時代に標本はいかにも不似合であったし、虫ピンはそれ以上に貴重な、もう永久に手に入り難いものと思われたのだ。今でも私はデパートの採集用具売場で、いくらも売っている虫ピンを見ると、なんともいえない気になって舌打ちをする。

焼跡では、病院のガレージだけが原形を留めた。私は焼ボックイで、その扉に自分らの移転先を、「右に転進す」と記し、友人宛に「おれは死なんよ」などと書き、そのあとに得意の「憂行」の文字を記した。

ずっとのちの話になるが、父は茂吉という歌人であったので、その弟子に当る人がそのときこの焼跡を見にきたらしい。すると妙な文句が書き残されており、妙な署名がしてある。病院は脳病院である。そこで、その人はこの字はてっきり精神病患者が書いたものであろうと考え、そのように平和な時代になってからある短歌雑誌に発表した。それを読んだとき私は精神科医になっていたが、苦笑も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com